

病態および応用獣医学教育で生物地理学的な視点が応用された一例と今後の課題

浅川満彦（野生動物の死と向き合う F・VETS の会 [元 酪農学園大学獣医学群医動物学ユニット/
野生動物医学センター]） 連絡先：mitsuhikoasakawa@gmail.com

1980 年代初頭から今年 3 月末まで、獣医師を養成する教育機関（獣医大）に奉職していた。要するに、市中で見かける動物病院の中で診療をするための基本技術を授けることをしてきたのだが、教授者である演者自身は獣医師免許を保持するものの、生業としての臨床経験はなく、獣医学系を構成するごく一部の分野（科目）を担当したにすぎない。もちろん、純粋な生物科学系と見なされる生物地理学がその担当科目群には包含されない。だが、獣医大における 40 年間の研究・教育・普及に携わった経験に照らすならば、この分野の知識・視点は不可欠であったと回顧される。

たとえば、動物やそれが保有する病原生物の歴史的由来を基盤に、疫学的な論考し、今後、どのような時空間で感染症が拡大するのかを予想するには、生物地理学が基盤情報となることは明確である。また、診療対象となる動物の特殊な形態・機能（至近要因的）の進化・生態的（究極要因的）な過程を理解しなければ、適切な治療や予防を期することはできない。なぜならば、獣医大の正規課程年限の 6 年間であり、教授される動物種数は極めて限られるからである。そして、多様な飼育動物と対峙することになる獣医師は、この限られた情報・知識から想像しつつ初見・初耳の動物診療をすることを余儀なくされている。その想像で至近・究極両要因をバランスよく思考することが必要となる。加えて、現在の獣医学・獣医療はワンヘルスの概念のもと、野生動物を含む自然生態系の健全性維持も課せられた。したがって、究極要因を思考する訓練が必要で、その教育モデルとして、たとえば、陸橋形成と島嶼隔離などが繰り返し影響を与えた日本産陸棲動物と、それが保有する寄生（共生）生物の性質である。そもそも、これら（特に、野生の王国である北海道ではなく、実は本州陸塊の生き物）は日本人である獣医学徒にとって身近な存在でもある。

本発表ではこれまでに演者が著者として参画した刊行物（浅川・石崎, 2025; 小綿・浅川, 2023）を基に回顧・整理し、今後の課題を提示したいが、とりわけ、高校地学が沈滞傾向にある現状では、

市民の底上げが不可欠であろう。その一手段として、一般への啓発・普及するための書籍刊行であろう。最近、演者は獣医学内に新興した学問分野について拙著を上梓したが（浅川，2021，2025）、単に珍しい知識の開陳（教養・趣味学問）ではなく、人々の生活に直接資する応用科学的側面を強調したものが望まれていると感じた。

本学会の中で論議をして欲しいが、そのための起爆剤として本講演を行うが、演者は本年次大会における一般講演としては第44回（89年）以降計17回行った。多くは個別事例であったので、今回の話題と重複することはないだろうが、第47回（92年）学会創立60周年記念学会賞受賞講演と第77回（22年）学会主催シンポジウム「ワンヘルスと生物地理」では重複部があるかもしれない。予めおことわりしておく。

引用文献 浅川満彦. 2021. 野生動物医学への挑戦—寄生虫・感染症・ワンヘルス, 東京大学出版会, 東京: 196 pp. / 浅川満彦. 2025. 獣医さんがゆく—15歳からの獣医学. 東京大学出版会, 東京: 240 pp. / 浅川満彦・石崎隆弘, 2025. 酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける研究・教育活動総括—2023年以降刊行に関する補遺. 酪農大紀, 自然, 49: 印刷中. / 小綿ななみ・浅川満彦. 2023. 酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける研究・教育活動総括—その設置申請から運用停止までの刊行物に基づく概観. 酪農大紀, 自然, 48: 85-118.